

## 2 - 3 . マーтонаの経歴と影響力

### 経歴

1910 フィラデルフィア生まれ（東欧からの移民の子） 12歳のとき手品師として荒稼ぎ

1927 テンプル大学入学 当初哲学を専攻するが社会学に専攻替え

「偏った道徳的先入観を交えず、客観的に人間の行動を検討することができるということを発見し、その喜び」を体験したとき、社会学に進むことを決心したと回想している。（Crothers[1987=1993:19]、Hunt[1961]からの引用部分）

1931 ハーバード大学大学院に進学 パーソンズとの出会い

1941 コロンビア大学助教授に就任 ラザースフェルドとの出会い

コロンビア - ハーバード枢軸 cf. シカゴ学派との対極

### ・コロンビア学派の特徴

機能的アプローチ 理論展開に対する関心 経験的研究 道徳的政治的無関心

Lazarsfeld, Paul (1901-1976) 多変量解析[multivariate analysis]の方法論で有名

ref.高根正昭 1979 『創造の方法学』講談社現代新書 5 5 3、Pp.93-122

このラザースフェルドとの出会いが、政治的に無関心かつ数量的な調査による社会学の「科学化」を促したのかもしれない

### 影響力

マートン自身の著書 = 1 2、編著 = 1 1、論文 = 1 2 5、書評 = 1 2 0

1970-1977年の間にマートンを引用した論文の数は、社会科学で2 3 3 8！

そのほとんどが、『社会理論と社会構造』

## 2 - 4 . 予言の自己成就[the self-fulfilling prophecy]

### トーマスの公理

「もし人が状況を真実[real]であると決めれば、その状況は結果において真実である」

人間は単に状況の客観的な諸特徴に対して反応するだけではなく、自分達にとってこの状況がもつ意味に対しても反応する

一度人々が何らかの意味をその時の状況に付与すると、続いてなされる行動やその行動の結果はこの付与された意味によって規定される

cf. ハンソンの「観察の理論負荷性」

### 社会学的寓話

z.b. 旧ナショナル銀行の取り付け騒ぎ(1932)

世間の人々の状況規定（予言又は予測）がその状況の構成部分となり、かくしてその後における状況の発展に影響を与える

### マートンによる定義

最初の誤った[false]状況の規定が新しい行動を呼び起こし、その行動が当初の誤った考えを真実[real]なものとすること[:384；報告者強調]

### 民族的人種的偏見と自己成就的予言

白人が黒人を労働組合運動から排除

白人 = 「黒人は、スト破りするし、低賃金でも働いちゃうじゃん」

黒人 = 「白人が労働組合に入れてくれないなら、スト破りもやるし、少しでも働いちゃお」

白人 = 「やっぱやつらは労働組合に合わないな」

悪循環じゃ

内集団の徳と外集団の悪徳

内集団[in-group]と外集団[out-group]

= 内集団 / 外集団という言葉は、サムナー[Samner, William Graham 1840-1910]の用語  
民族的な外集団：国籍・人種・宗教などの点で「我々自身」とは決定的に異なっている集団  
民族的な内集団：上記の人々ではない「共属意識」を共有する集団

黒人が白人にとっての徳を身につけても悪徳だと見なされる  
「すればするで非難され」「しなければしないで非難される」

マートン自身は、慎重な社会的計画によって民族的偏見は徐々になくなるという。

z.b. 黒人の労働組合参加

予言の自己成就という悪循環を断ち切るには「循環運動を呼び起こす最初の状況規定を放棄」[:386]  
することが必要。

「危惧の念を實在に転化する[要するに、自己成就しちゃう]自己成就的予言は、慎重な制度的規制が  
欠如した場合にのみ作用する」[:397]

2 - 5 . 社会構造とアノミー[anomie]

なぜ、逸脱行動の頻度が、社会構造の相違につれて異なるのか、どうして逸脱の仕方が社会構造の相違につれて、その種類や形式を異にするのか

デュルケイム[Durkheim]のアノミー

ref. Durkheim, Emile 1897 *Le Suicide*, Presse Universitaires de France =宮島喬訳『自殺論』(世界  
の名著 47) 中央公論社

アノミー的自殺[suicide anonique]

社会の規範が弛緩したり、崩壊したりして、個人の欲求への適切なコントロールが働かなくなる結果、  
無際限の欲求にかりたてられる個人における幻滅、むなしさによる自殺。(宮島[1979:13])

「或る社会や集団における相対的な無規制の状態」:149

デュルケイムは、自殺の一般的な原因としてアノミーを結びつけたが、マートンは、アノミーという  
概念をもっと使えるようにした。

個人的適応様式の類型論

当時(今でも?)のアメロカにおける文化的目標は、「金銭的成功」:126

マートンによれば、この文化的目標と、それを獲得するための制度的手段の関係こそが、アノミーを  
生み出す

適応様式	文化的目標	制度的手段
同調	+	+
革新	+	-
儀礼主義	-	+
逃避主義	-	-
反抗	±	±

(+)は「承認」、(-)は「拒否」、(±)は、「一般に行われている価値の拒否と新しい価値の代替」

同調[Conformity]

革新[Innovation]:131

効果は多いが制度的には禁止されている手段を用いる

儀礼主義[Ritualism]:139

高遠な文化目標を放棄するか、または切り下げて、そのかぎりで自己の志望を果たす

逃避主義[Retreatism]:141

社会学的に見れば、これらの人々は、真の「異邦人[alien]」をなしている

z.b.精神病患者、身寄りのない者、放浪者、無頼漢、慢性アルコール依存症者、麻薬常習者

反抗[Rebellion]:144

その環境をなす社会構造から逸脱し、新しい全く一変した社会構造を実現しようとする

#### マーソンの文化構造と社会構造

文化構造は、「特定の社会ないし集団の成員に対して共通な行動を調整する、組織化された規範的な価値のセット (Merton[1969:162; 苦訳])」。

社会構造は、「特定の社会ないし集団の成員が様々に関係する、組織化された社会関係のセット (Merton[1969:162; 苦訳])」。

マーソンにとって、アノミーという概念は、「文化構造」の崩壊であり、「社会構造が排除しているような行動と態度を文化構造が呼び起こすことによって、文化構造と社会構造がうまく統合されないとき、規範の崩壊へ、すなわち無規制状態へと向かわせる緊張[strain]が存在する」(Merton[1969:163; 苦訳])

要するにアノミーへと向かわせる緊張とは、「文化的目標 - その目標がどんな性質のものであれ - と制度的手段の利用可能性との間の葛藤である (Merton[1969:166; 苦訳])」。

#### 【参考文献】

- Crothers, Charles 1987 *Robert K. Merton*, Ellis Horwood Limited =1993 中野正大・金子雅彦訳 『マーソンの社会学』世界思想社
- Hunt, Morton, M. 1961 'How Does It Come To Be So?', Profile of Robert K. Merton, *Newyorker*, 36, Pp.39-63.
- Merton, Robert King 1938 "Social Structure and Anomie.", *American Sociological Review*, 3-5: Pp.672-682.
- 1959 "Social Conformity, Deviation, and Opportunity Structure: A Comment on the Contributions of Dubin and Cloward.", *American Sociological Review*, 24-2: Pp.177-189.
- 宮島喬 1979 『デュルケム自殺論』有斐閣新書
- 大山小夜 2004 「アノミー論」松下・米川・宝月編 『社会病理学の基礎理論』学文社、Pp.119-135.
- Wright, Charles and Hilbert, R. E. 1980 "Value Implications of the Functional Theory of Deviance.", *Social Problems*, 28-2: Pp.205-219.